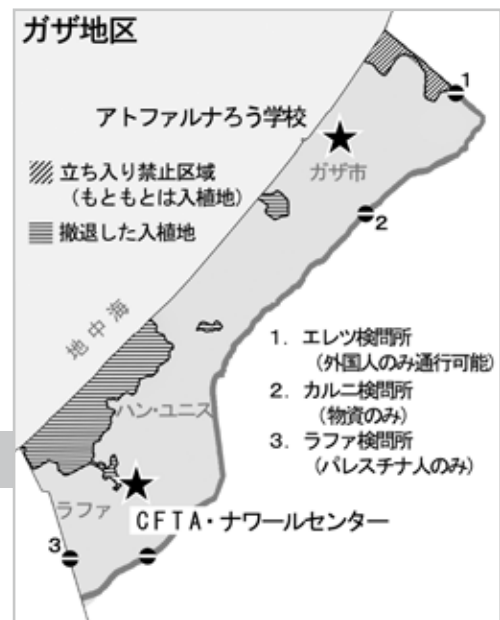


昨年6月、ファタハとハマスの戦闘以降、物資だけでなく外国人の出入りも厳しく制限されたガザ。キャンペーンのエルサレム事務所はガザに入ろうとしてきましたが、イスラエルからの許可がずっと下りませんでした。3月末、ようやく許可が下り、新任の川越駐在員がガザに入りました。

# はるみ 駐在員・川越東弥が ガザから報告します



ガザの川越さん、ガザに入ったのは5年ぶりだということですが

5年前はまだイスラエルがいて入植地もあり、チェックポイントも色んなところがありました。パレスチナ人が通れない入植者専用のきれいな高速道路があって、その脇の砂利道をパレスチナ人が通っていました。今回は入植地がないのでどこでも行き来はできます。入植地だった場所も、彼らが壊して出て行って今はそのままですね。空き地が広がっているという感じです。

イスラエルからガザに入る検問所の様子は？

エレツのイスラエル側の検問を越えると、パレスチナ側の小屋みたいな検問所に行く2～300メートルの間、昔工業地帯があった場所が壊されて、瓦礫のまま放置されています。時々子どもが何かを探しに来っていますが、荒廃した感じですね。エレツから北部のベイトハヌーンを通過して、ガザ市内に向かいますが、北の方は活気がありません。昔はオレンジ畑がありましたが、そういうものは全く残っていません。以前はタクシーとかポーターが寄ってきたのですが、今はタクシーも待っているのは3台4台あれば多いほうで、とても静かです。人の行き来が全くなくなりましたからです。

ガザから出てくるときは検査が特に厳しいです。がらんと通る人がいなくて、中も広いのでどこに行けばいいのかなど迷っていると、マイクで上から声がします。気付くとガラス越しにずっと5～6人のイ

スラエル兵が私を見下ろし、私の一挙手一投足を見ていたというわけです。そこに入ってとか、両手を上げてとか、足はマークがあるところにちゃんと立ってとか、全部指示の通りに動きます。たぶんX線を当てていると思います。歯医者さんのレントゲンみたいなもので、私の体をぐるっと一周回って撮られている感じです。

ガザ市内の人通りは？

非常に少ないようです。確かに、以前は車が渋滞して、みんなクラクションを鳴らしていたのに、クラクションを鳴らすほど車がない状態です。夕方とか夜になるとほんとにまた少なくなって、人通りもありません。でも、銃声が聞こえるとか爆音が聞こえてくるというようなことはないです。

商店はどうですか。

いわゆる露店のマーケットは営業していますが、普通の店は閉まっているところも多いです。店を開けていても別に新しい品物が入っている

わけでもなく、一年以上前のものでも、とりあえず置いてあるという感じですね。道を歩いている人はいますけれど、品物の値段がすごく上がっているの、なかなか買い物もできないという状態ですね。食べ物は買うけれど、洋服などは買わないということです。

ロバの荷車も目につきます。農作物とか重い物を運んでいるだけでなく、人もそこに乗っかって移動しています。ガザにガソリン自体、十分な量が入ってきていないからです。ハンユニスに向かう途中にはいくつもガソリンスタンドがありますが、特に昨日の朝は500メートルもの車の列が続いていました。1日8時間待って100シェケル(約3000円)分だけガソリンが買えるそうですが、15リットルほどでしょうか。自家用車だけでなくバスなども長い列を作っていました。それが朝8時だったんですが、3時ごろまた同じ道を帰ってきたときにもまだ100メートルぐらいいは待ったままでした。

こうやって、ガソリンを買えた人が流しのタクシーでお金を稼いでい



エレツ検問所周辺



たり、調理用のプロパンガスをつなげて車を動かしている人がいたり(写真上)、調理用の油を使って動かしたりする人も多いみたいです。ハンユニスでは、ガザ市よりもっと物資が少ないですが、それは、ガソリンがないためにガザ市までは荷物が来ても、そのあと他の地域に届かないということのようでした。ハンユニスは特に車が少なくなっていて、タクシーも捕まえられない。アトファルろう学校もスクールバスが動かさなくて困っていました。

#### 物の値段、店の中の様子？

マーケットの食料品、果物、野菜は予想していたほどは高くないんです。なぜかというところガザの農産物はヨーロッパに輸出できないので、腐るよりはと安く売られているからです。トマト、バナナ、インゲンとか、花などです。一方、魚、肉、卵などは売られてはいるけれど数が少ない。一般の家庭では、毎日食べるものが同じで、ホンモス(豆のペースト)とファラフェル(豆のコロッケ)と

パン。肉が全然出ない。やっぱり高く買って買えない。鶏は生きたまま籠に入れて売っていました。泊めてもらっている家で出てくるパンもすぐくぼそぼそして、エルサレムで食べているパンとは食感も味も違って質がかなり劣っています。

トイレトペーパーやティッシュや洗剤は一時まったくないという話でしたが、今は思ったよりも品物はあります。ただ、すごく質が悪く、クッキングペーパーのようなごわごわしたトイレトペーパーです。炭酸飲料も甘すぎておいしくないものはあるんですが、普通のスプライトとかコーラはないので、エルサレムから持っていくとそれだけで喜ばれます。日用品はエジプトから入っているようです。

レストランも閉まっているところが多くて、海沿いにあるちょっと高めのレストランは一度入っただけですが、がらーんとしています。お客は欧米人が3人ぐらい。ホテルも海沿いにたくさんありましたが、ほとんど閉まっていて、開いているところも一泊100ドルぐらいの値段になっています。

パレスチナ人はタバコをよく喫いますが、タバコもすごく少なくなっていて、いっぱい持ってきたらガザでビジネスができるよって言われました。本当に品薄で、子どもが路上でちょこちょこ売っていたりするんですけど、高くなっているようです。

#### 停電の具合は？

先週ガザへ来たときは最初の二晩が停電でした。3、4時間ぐらい突然停電になって、また突然ついたりして、すごく不安定です。ガザへ入るときに、エルサレムから何か持ってきて欲しいものがある？と聞いたら一番最初に「ろうそく」と言われたんですね。停電になる割にはろうそくのストックがガザにはなく、手に入らないのでろうそくを買ってきて欲しいと。持って行った最初の日に停電になって、早速ろうそくを使いました。ランプのようなものも使っていますね。停電の長さは、最近では3~4時間と短いみたいですが、電気がないと冷蔵庫もつかえず、食べ物もたないですね。ハンユニスでは先週、24時間以上電気が来なかったと言っていました。

煮炊きするのはプロパンガスですが、石油が高いのでガスボンベのストーブを冬は使っていて、ガス一本大きいのが56シェケル(約1600円)って言っていました。以前は35シェケル(約1000円)しなかったそうです。ストーブだと1週間もたないので、2家族分のガスを買うとほとんど給料がなくなったと言っていました。大変だと思います。通信員のイブラヒムは、なんとか仕事を見つけてしのいでいるみたいですが、全然足りないから先月は電気代が払えなかったと。彼の家に泊めてもらっていますが、私のはるばる来たからといって、日中に電気でお湯

## マジダ・エルサッカさんからのメッセージ (CFTA 広報・渉外担当)



私は2007年のお正月を日本で迎えました。それが私の最後の旅行で、それ以来国境が閉まっているので、ガザから出たことがありません。状況は日ごとに、月を経るごとに悪化しています。ガザの封鎖は、ビジネスマンやハマス、ファタハの政治家といった人々だけの問題ではなく、全ての人に影響を及ぼしています。物価がとて上昇しているため、多くの人々が日用品を購入できません。失業率の上昇も問題

となっています。日々の生活をまかなえるだけの収入がありません。

これが生活状況です。占領や封鎖のみについて話しているのではなく、ガザには生活というものがありません。これが問題なのです。私たち一人一人が心理的な問題を抱えており、全ての人にとって危険な状態にあると思います。例えていうならば猫を隅っこに追い詰め、逆襲させるようなことをガザの人々に対してやっているのです。

を沸かしてとっておいて、シャワー浴びなさいと言ってくれましたが、家族はほとんどシャワーも使っていないようでした。

水はありますが、水道の水は汚染されていて地元の人も飲めないから、フィルターを通さなければなりません。フィルターとかミネラルウォーターは一応あります。以前報道されていたような下水が溢れているところは見ませんでした。ビーチキャンプはゴミがひどかったですし、臭いもすごく強かったですね。ゴミ回収車は時々来ているみたいです。

以前と違って外国人が珍しいので、街を歩くとじろじろ見られるようになりました。カメラを持っているので、子どもたちがみんなわーっと寄ってきますが、裸足の子も結構いて、靴を買ってもらえないって言ったり、履いていてもすごくぼろぼろだったり。着ている物もすごく汚れていて穴が開いているのが多かったですね。

**アトファルナやナワールセンターのスタッフたちはどんな問題を抱えていましたか？**

アトファルナでは美術の先生と話をしましたが、美術で使う材料がなかなか手に入らないという。なんとか工夫して、例えば外にある木の枝とか葉っぱとか花とかを持ってきて、それを材料にして授業にしているようです。

補聴器の電池が切れても買えないので、補聴器をしていない子も結構多いです。紙も足りないようで、ジェリーさんも日本で話していましたが、試験のときに一番困ったと。

鉛筆とかノートとかはなんとか今あるものを使っているという感じですが。何もないというわけではないけれど、全てが足りない状態です。イスラエルからいくら入っているみたいで、売られていてもすごく値段が高く、アトファルナは規模が大きい学校なので必要な分を本当に満たせないとのことでした。

アトファルナでは電気はついていました。自家発電機を使っているのですが、燃料が高いということでした。ナワールセンターのほうは、なぜかいつも停電で、半日のうち7回も8回も9回も電気がついたり消え

たりしている状態でした。

ナワールセンターでは、子どもたちに聞くと、ほとんどみんな毎日来ているようです。ここ以外では活動に参加したり遊べる場所がないという印象を受けました。子どもたちは外に行きたがりですし、スタッフたちは、子どもたちを外に連れて行きたいけれど、何かあったときに自分たちが守れるだろうかとすごく不安を感じています。ハンユニスの周辺はイスラエルの軍事侵攻がしばしばあるからです。

ナワールセンターのアマル所長の話では、2年前に海水浴に行った家族が、海の方からイスラエル軍に撃たれて7人が殺された事件を鮮明に覚えていて、暖かくなったら海に行こうかと話をしても「絶対に行きたくない」とトラウマになっている子どもがいるそうです。ハンユニスに住んでいると、イスラエル軍のヘリコプターとかを日常的に見聞きする経験が多いから、そしてイスラエル軍は大抵夜中に来るので、暗闇が怖いという子がとても多いそうです。ですから、演劇活動で自己表現させるなど心理的なケアができるようにしていると言っていました。

**ガザでどんなことを感じましたか、印象を聞かせてください。**

活気がないというのがまず第一印象です。話していてもみんな「うつうつとしている」と言います。本当に生活が成り立たない。何とかやりくりするしかないけれどもそれもいつまで続くのか分からず、失望している人が多いですね。私自身も三日間も滞在すると、エルサレムにいるときは違って、やっぱり気持ちが重くなります。

アトファルナやナワールでスタッフに話を聞いていくと、彼らはだんだんと打ち解けてきて、終わるころにはすごく感傷的になって本当に涙を流すほどです。アラビア語の通訳をしてくれるイブラヒムも感情移入して続けられなくなり、少し外へ出て行ったり。この状態で暮らしている彼らは本当に苦しいんだ、という



のが身に沁みた気がします。私がエルサレムから来たからと、みんなお菓子とか飲み物とかあるものを何でも出してくれてとても歓迎してくれる。ですから表面的には分からないのですが、話を聞いていると、すごく苦しいというのがよく分かりました。

将来の希望はありますかと聞くと、みんな最初はため息です。子どもたちはお医者さんとかエンジニアとか言うんですけど、大人の人は「はあ」って感じですね。第一声が。

スタッフに個人的なことを質問すると、給料が低い上に物が高くなっていてとても生活が苦しい、というのと、いつになったら道が拓けるか、事態が改善するかがわからない。いつまでたってもいつまでたっても同じで、いつになったら私たちの生活はよくなるのだろうという話ばかりです。

ある女性の先生は、婚約をしてもう二年が経つけれども結婚の目処も立たない。お金が必要だし、お父さんが亡くなったということもあって、どんどん延期している。たとえ結婚したとしても住む家を借りるお金がない。子どもが生まれてもこの状況下でどうやって育てていいか分からないと嘆いていました。職と収入がある人たちでさえこういう状態ですから、男性の半分以上が失業している社会の状態は察しがつくでしょう。

そんな中でも、アトファルナでもナワールでもスタッフは頑張っていました。エレッツ検問所での検査など面倒なことはありますが、でも多少の不快感だけでガザへの行き来ができるならば、何度でも訪れようと思っていました。

(4月3日電話インタビュー)